

令和2年度第1回経営会議 会議概要

1 開催日時

令和2年6月26日（金） 13：30～15：30

2 場 所

本部棟3階 大会議室

3 出席者（委員12名中11名出席）

学外委員：平賀委員、山本委員、谷村委員、米谷委員、木村委員、横向委員
（欠席：相澤委員）

学内委員：千葉委員、鈴木委員、堀江委員、石堂委員、狩野委員
その他、各本部長、各学部長、各室長及び関係職員が出席。

4 審議事項及び審議結果

(1) 令和元年度決算について

ア) 令和元事業年度に係る業務の実績に関する報告書について

イ) 収支決算（監事監査報告を含む）について

業務の実績に関する報告書及び収支決算について、狩野委員及び堀江委員から説明し、質疑を経て、原案のとおり承認された。

5 情報提供

(1) 岩手県立大学の本年度重点取組について

岩手県立大学の本年度重点取組について、鈴木委員から資料に基づき説明した。

6 その他

(1) 新型コロナウイルス対策について

本学の新型コロナウイルス対策について、事務局から資料に基づき報告された。

(2) 新型コロナウイルス感染症拡大に係る本学の経済的支援について

新型コロナウイルス感染症拡大に係る本学の経済的支援について、事務局から資料に基づき報告された。

7 意見交換等

学外委員の意見・質問等に対する学内委員及び事務局等の回答は、次のとおり。

- 業務実績の内容について（審議事項（1）ア）関連）

令和元年度の事業年度に関わる業務実績の中に、令和2年度実施のような今後の取り組みが資料に盛り込まれていることについて質問があり、令和元年度から細かい所を詰めて、令和2年4月からスタートできるように検討したり結果を出したというところで評価を行った旨回答された。
- 項目別評価から見た大学の経営状況について（審議事項（1）ア）関連）

計画どおりに進んでいるというA評価が91%であり、経営状況が良好との意見について、設置者である岩手県から非常にご理解をいただき、様々な部分で運営交付金という形で対応していただいております、ひとつの大きな要素だと説明された。それ以外でも経費の削減に努めつつ、必要なものに必要な財源を投資することを原則として行っており、今回の新型コロナウイルス対策含め、こういった形で対応することが必要だと感じている旨説明された。
- 項目 No.10 国際化・グローバル化への取り組みについて（審議事項（1）ア）関連）

延べ58人の学生が参加した英会話交流イベントについて、参加人数が少ないのではとの質問に対し、昨年度試行的に行ったものであり、人数の目標数値は設けていなかったが、比較的学生からも好評だったという事で実績のひとつとした旨回答された。
- 外部資金について（審議事項（1）ア）関連）

外部資金比率が他大学と比べて低いのが、業務実績の概要に関しては項目 No.21 をA評価としている理由について質問があり、金額はどうしても分野によって大口小口と偏りが出るものの、応募の数が過去最高となっている旨回答された。また、応募数を増やすための取り組みとして、学長をトップに支援チームを作り、結果的に応募率、採択率も少し上がっているところでA評価とした旨説明された。次の目標として、金額で結果を出すということによりかという質問に対し、その通りである旨回答された。
- 学生アンケートの改善方針について（審議事項（1）ア）関連）

学生アンケートの改善方針について質問があり、もともと授業自体の改善のためにアンケートを採っていたが、カリキュラム自体も変わってきており、見直しが必要

ではないかとの意見があった旨回答された。また、教学 I R の観点から、そもそもアンケートを使う目的が変わってくる可能性があり、実際見直しまでは至らなかった旨回答された。

- 運営交付金の額について（審議事項（1）ア）・（2）イ）関連）

運営交付金は絶対額が毎年減っているのかとの質問に対し、現在の第3期中期計画中はこういう形で運営交付金の資金を決めるという協議を県と行い、ベースは中期計画期間中の6年間は同じである旨回答された。一方、大学も20年がたち、これから維持修繕経費がかかってくるため、決算の概要にもある積立金でその当たりの金額を用意している旨補足された。

- 大学の自己評価、大学への評価の方法、中間評価について（審議事項（1）ア）関連）

評価方法について達成度評価になっていることから、一般日本人として大きいチャレンジなことは書けない、達成までの努力は評価しないという話がされた。加えて、これは日本的評価システムの一つの欠点の表れであり、文科省の審議会に出て言っても変えられない状況もあり、大学の中では少しチャレンジなことも言えるようにしてきている旨説明された。

また、中間評価を4年目に行うため、今年度にその中間評価に向けて数値化出来ているものは数値で評価するなどトータルとして評価する予定である旨説明された。

さらに、県の評価委員について質問があり、県の評価委員の委員長は岩手大学の先生で、岩手大学の中で評価のことをある程度長くされている方になっていただいており、他に民間の方であれば、会計士の先生や男女複数の先生方、東北大学のある程度評価に詳しい先生という形で、外部の見識ある先生方がやっけていただいている旨紹介された。

- 学生側からの大学の評価を見る方法について（審議事項（1）ア）関連）

現在のアンケートでは不十分であり、利用者（学生側）にもっと踏み込んだアンケートを作らないとまずいのは、他の大学だとそういった所はかなり踏み込んでやっている状態だとのことご指摘があった。これに対し、他大学の状況なども勉強させていただき、ご指摘のような検討が出来るよう努力したいと思う旨回答された。

- 先生方と職員の人数構成について（審議事項（1）ア）関連）

先生方228人・職員100人の構成だが、これはどれくらいの構成比が妥当なのか、また、職員が9名程減っているというのは業務の効率化が図られているということなのかという質問があった。これに対し、毎年度のベースアップの中で何とか教員の数は現状維持し、職員は毎年一定程度人数を調整していくことを現場で定めている

旨回答された。また、先生方の比率を今より高めていくことが望ましいのかとの質問に対し、本学の場合は教員1人あたりの学生数は他の公立大学と比べて非常に少ないという点が触れられ、問題は中の質であり、質の問題で改善する余地は十分あると思う旨回答された。

- 入試の枠組みについて（審議事項（1）ア）関連）

県内の実業高校の生徒など、県内の生徒にもう少し手厚くできないかとの質問に対し、本学の場合設立のときから県内の学生たちに進学機会をとということで、各学部の3割が県内の高校からという枠にしてあり、さらに実業高校となると考えていかないと難しい部分がある旨回答された。また、今年度高校で聞いている限りでは、センター試験の成績で志願を諦める流れはあるようだということで、センター試験等も一つの要因として、大学としても難しいが、今後どうするか考えていきたい旨説明された。

- 大学の休学・留年・離学者について（審議事項（1）イ）関連）

大学についていけない、または経済的な問題でやめてしまう学生も結構いるのかとの質問に対して、（四大学部の）休学者数は29年度32人・30年度67人、留年者は29年度40人・30年度47人、離学者は退学と除籍も含めて29年度33人・30年度58人と、30年度はかなり増えている旨回答された。また、経済的な理由での退学と、他のことをしたい・分野を変えたいという理由での退学は結構いる旨回答された。

- 大学を卒業した後の就職について（審議事項（1）ア）・イ）関連）

大学に入って、その先自分が何をやるのか・就職先とか何かをイメージさせるのが大事ではないかと思っているとの意見に対し、これからはこの大学で何を学んだか、自分は何を身に付けたかということを徹底的に意識すれば、この大学の学生たちは伸びしろがある学生が多いと思う旨回答された。

以上